



# 図書館だより

2011.2  
No. 15

長崎県立大学佐世保校附属図書館 〒858-8580 佐世保市川下町123  
TEL 0956-47-2191(代表) <http://sun.ac.jp/lib>

## 研究情報探索 ～半世紀の変遷～

池田高良

(学長)

学長退任に当たって「図書館だより」に一文を残すよう依頼されました。そこで表題について書いてみることにしました。図書館業務の一つに研究情報に関する二次資料の整備があります。研究に関する文献探索の便宜に供するためです。しかし、現在は研究者が自らインターネットで探索することが一般化したために、紙媒体の二次資料を整備していないところも多くなりました。

私は1960年に大学の研究室に入って以来、今まで50年間に亘って、病理学関係の教育、研究と病理診断業務にたずさわってきました。振り返ってみると研究情報（文献）の探索方法の変遷は研究のスピードや研究の質の向上にも関係してきたように思います。現在、研究論文の掲載誌は国際的に流通している学術誌、国内の全国学会誌、地方学会・研究会誌、学内紀要、研究所紀要、さらに商業誌など種々です。そして、現在、国際的に最も多く使用され、流通している論文言語は英語です。日本人ゆえに和文で発表すべきとの考え方もかつては存在しましたが、今は昔話になりました。研究成果は第三者、そして国際的に理解されなければ価値が認められないのです。研究は世界のどの国でも遂行可能です。同類の研究を行う研究仲間同士が情報を交換することは一般化していますが、実際は競争相手でもあるのです。

本文は時代とともに研究が進歩するように



文献探索方法も変化してきたことを、私自身の体験から述べるものです。年代順に記します。

### 1960年代

長崎と広島で大学では原爆被爆の影響が大きく、図書館整備が不十分でした。文献探索は他大学の図書館をも利用していました。ただ幸いなことに両市にはアメリカ合衆国の原子爆弾傷害調査委員会が設置され研究所には図書館もありました。この図書館には最新の国際学術誌や図書が整備されていて私共も利用できました。当時の文献探索は雑誌の目次から興味ある論文を選び、読みながら必要な箇所をノートに書き写すという極めて原始的な情報収集の方法でした。わが国の大学には複写機は殆んどなかったのです。

ところで1965年にイリノイ大学に研究留学した頃、生物学系分野では既に研究に関する二次情報資料誌が毎週届いていました。この中には発行された最新の学術誌ごとの目次

---

が掲載されていました。Current Contents, Biological Scienceと称され研究者にとって必須の資料でした。研究室では何人もの大学院生がこの情報誌の頁をめくる音が耳ざわりに感じるくらい文献探索に熱心な光景がありました。研究のオリジナリティーの先陣争いが激しいことを物語っているのです。Current Contentsに採録される学術誌は多くの研究者から引用されていることが条件なのです。学術誌の引用度数を表わす指標がimpact factorと言われます。多くの研究者が関係している分野の学術誌ほどimpact factorは高くなります。英文の学術誌が殆んどで、当時はドイツ語、フランス語の学術誌も僅かですが採録されていました。

### 1970年代

研究論文の発表は未だ国内学術誌が主流でしたが、生物学関係分野では国際学術誌への投稿が徐々に増加した時代です。文献探索も忙しくCurrent Contentsの利用も一般化してきました。それだけ研究上での競争が激化したことを物語っています。

### 1980年代

生物学関係のみでなく自然科学系全般に亘って研究論文は次第に英文中心となり国際的学術誌への投稿がさらに増加してきた時代です。一方で学内紀要を始めとする和文の学術誌の評価は低下し、投稿論文数の激減によって廃刊になる例も多くなりました。文献探索は電子機器の進歩があつてインターネットで入手する時代に入りました。

### 1990年代

電子機器の急速な進歩によって研究論文の投稿から受理に至る作業がインターネットで可能となりました。さらに論文を電子媒体のみで発表する、いわゆる「電子ジャーナル」が出現し、新しい研究論文発表形式とな

りました。印刷代、別冊代の経費節減にもなり、投稿から発表までの期間も短縮しました。そして多くの学術誌が電子ジャーナル化し、図書館では紙媒体による学術誌の購入は減少してきたのです。

### 2000年代

学問の世界では競争も評価も日常化しました。それに耐え、また享受しながら研究者は成長して行く時代になりました。人文社会科学系の国際的学術誌も評価が行われております。新聞社が毎年発行する大学ランキングの資料には国際的評価が用いられています。今や人文社会科学系の教育も研究も国際通用性や質が問われる時代になりました。近年は学術誌のみでなく、小説、随筆、詩・俳句なども英語に翻訳され発行される例も非常に多くなりました。外国人の日本・異文化理解に貢献しているのです。

先生方には自らの研究を英文で発表するよう努力されることを要望します。

終わりに、長崎県立大学が国内のみでなく国際的にも魅力ある大学として評価される時が来るのを楽しみにして待っています。



# 地域に開かれた 大学図書館を目指して

阿部 律子

(佐世保校附属図書館長)

長崎県立大学（現長崎県立大学佐世保校）附属図書館は、広く県民の方々に大学図書館を利用していただくことを目的に、平成3年に県内に居住する18歳以上の方に図書館の利用を開放いたしました。ただし、当時は図書館の利用と言っても、閲覧だけに限られ、図書の貸出しは認められていませんでした。そのため、図書の貸出しを要望する声が多数寄せられました。これを受けて、他大学の事例なども参考にしながら、検討が進められました。とはいえ、平成3年の時点で、図書の貸出しを認めていたのは全国に39あった公立大学のうちでわずか13校だけで、西日本地区に至っては3校に留まっていました。検討の結果、平成5年4月1日から「県内に居住する18歳以上の者及び事業所等に勤務する者。但し、大学受験等のための利用者を除く」という利用資格を有する人なら誰でも大学図書館を利用でき、かつ2週間に3冊の貸出しも可能となりました。こうして、西日本地区では4校目の地域に開かれた公立大学図書館となりました。そして、平成17年には、年齢制限も15歳以上の高校生または専門学校生に引き下げられ、現在に至っています。今では高校生や専門学校生の登録も増えつつあります。

それでは、本図書館は県民のみなさん方にどれくらい利用されているのでしょうか。近年の県民利用者の年間登録者件数を示してみましょう。

ここ数年来、年間300名を越える県民の方々に本図書館を利用いただいています。今年度の特徴としてあげられるのは、9月末の時点で登録を更新された方の数が、すでに前

## 県民利用者の年間登録件数

	新規	更新	合計
平成18年度	212	162	374
平成19年度	163	161	324
平成20年度	185	142	327
平成21年度	160	154	314
平成22年度	95	157	252

\*平成22年度は4月～9月末までの数値

年度の数を上回っていることです。少しずつではありますが、県民の方々に大学図書館の良さが認識され、それが登録更新につながっているのではないかと思います。

では、どのような県民の方々にご利用いただいているのでしょうか。まずあげられるのは、佐世保校近辺にお住まいの方で、気軽に立ち寄ることができる点が好まれているようです。高齢者の方々の利用も多く、最高齢者は81歳の男性で、その他70歳代の方々も見受けられます。高齢者の方の利用目的としては「勉強のため」、「経済学の学究を深めるため」などをあげる方が多いようです。また、帰省した際に本学の図書館を利用している佐世保出身の他大学の学生や大学院生の方々、あるいは県内在住の小・中・高校の先生方、さまざまな専門職の方々には、「研究のため」、「文献調査のため」に大学図書館が役立っています。専門職の母と高校生の娘という親子の利用もあり、微笑ましい限りです。また、佐世保校の立地から、相浦陸上自衛隊や米軍基地にお勤めの方、あるいは国際都市佐世保を反映して、アメリカ籍や中国籍などの外国籍をお持ちの方の利用も見受けられます。近年では長崎市、諫早市、大村市、雲仙市など県南部の方々や、平戸市、松浦市といった県北部の方々など、遠方にお住まいの方々にも主として「研究のため」にご利用いただいています。小説などの娯楽本から様々な分野の専門書に至るまで、大学図書館ならではの充実した28万冊の書籍を県民の皆様方に提供

できていることは嬉しい限りです。

「地域の知の拠点」、「地域の生涯学習の拠点」としての大学図書館、そして「県民の方々が気軽に利用できる大学図書館」を目指して、

県民の方々へのよりいっそうの浸透を図りながら、さらなる努力を重ねてゆきたいと思っております。

## 経済学の 古典書への誘い

柳田 芳伸

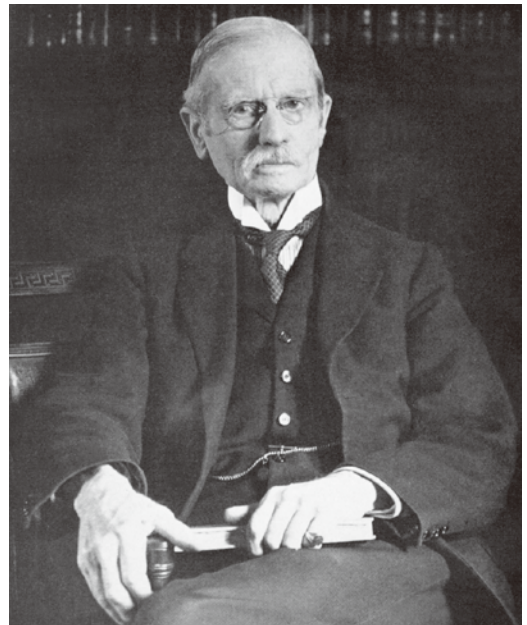
(経済学科)

まさに夢のような話である。ゴールドスミス文庫（1903年からロンドン大学所蔵）とクレス文庫（1929年からハーバード大学所蔵）が一気にデータベースで公開（有料）されたのである。こう書いてみても、きっと大多数の人はピンとこないであろう。1450－1850年に連綿と公刊された61000点の経済的著作、440点以上の定期刊行物、および著名な経済学者の認めた約350通の書簡が椅子にすわったまま、気ままにパソコンの画像から検索、閲覧、印刷できるようになった、このように伝えれば、より多数の方々にもこの朗報のもつ意味をわかって戴けよう。

しかもさしあたり2ヶ月間だけの試用とはいえ、本学図書館においてもこれを利用できるようになったのである。夢のような現実である。私が研究を始めた30年余り前には夢想だにできなかったことである。これで、もはや資料や本がないからといった言い訳や愚痴を口にできなくなった。

もとよりこれらの世界最大の経済学書文庫はあらゆる言語の関連著作から構成されているわけではない。けれども両文庫をくまなくあたれば、主要な経済思想の成立や発展の過程を克明に辿りえるのは疑うべくもない。奇貨おくべし。この絶好の機会に、是非とも諸賢の各々の知的関心に即して、それぞれの思索の源泉を訪ねられんことを切望してやまない。

ところで、上記の二大文庫の主部を形成したのはフォックスウェル (Foxwell, Hervert Somerton, 1849－1936) というロンドンのユニヴァーシティ・カレッジの経済学教授であった。W.S.ジェヴォンズの『通貨および金融研究』（1884年）の序文執筆や、A.メンガーの英訳版『労働全収権論』（1899年）に付した卓越した序文などで多少知られているものの、一般的に影の薄い経済学者である。絵画や書物の第一級のコレクターでもあったJ.M.ケインズはフォックスウェルのことをもはや愛書家 (bibliophily) というよりも愛書狂 (bibliomania) と評している。その収集振りは凄絶である。常に収集リストをポケットにひそめ、青鉛筆と電報用紙を携帯しながら、古書店からの目録送付を待ち構えていたといわれている。1882年1月には、今

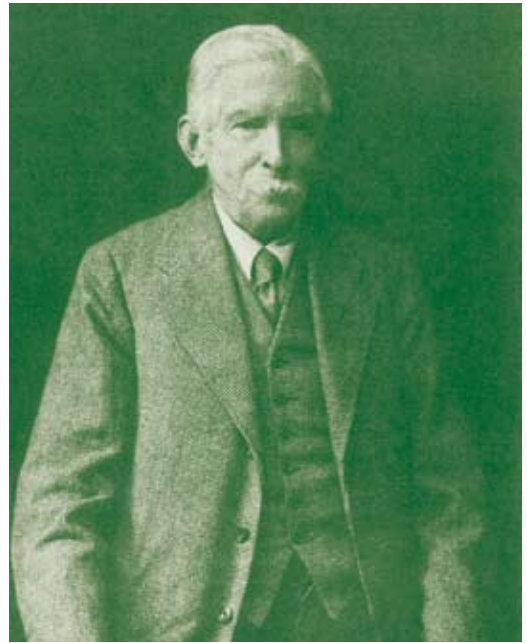


HERBERT SOMERTON FOXWELL

UNIVERSITY OF LONDON LIBRARY  
CATALOGUE OF THE GOLDSMITHS' LIBRARY OF  
ECONOMIC LITERATURE Vol.1 (Rep.1982) 表紙絵より

日では時価千数万円を下らない初版『国富論』（1776年刊、発行数500部）をなんと3シリング半で購入した。

優れた文献コレクションの大半は、その収集者の鮮明な問題意識と遠大な洞察力の下に構築されている。上の二文庫もフォックスウェルの非凡な知のコスモスを体現しているといえる。パソコンを介した文字データのみではあるけれども、確かに、私達は身近でそれらに接近できるようになった。しかしそれだけでは、原書の有する質感や量感、あるいはその大きさや紙質、そして何よりも星霜を経てきた歴史的情趣を実感しえないこともまた事実である。その意味で、まずは本学が所蔵するボナー（Bonar, James, 1852-1941）文庫に触れたり、また長崎大学に足を運ばれ、武藤長蔵（1881-1942年）文庫を見学させることを推奨しておきたい。



JAMES BONAR

Proceedings of the British Academy,  
Vol.27 (1941), p.358より

## 図書館の アルバイト経験と本 吉木 悠 恭

(経済学科)

私の尊敬する企業の社長の方が、「本との出会いは友人との出会いである」というようなニュアンスのことをおっしゃっていた。人並みとはいえないまでも少しは本を読む私が、この言葉に出会ったときなるほどと思った。と同時に自分は本との交友関係をうまく維持・発展させることができているだろうかとも思った。思い返せば、小学生・中学生のころはある程度は本を読んでいた記憶がある。といっても、ほとんど小説しか読んでいなかったのだが。

しかし、高校生になると同時に読書から遠ざかっていた。原因は中学校までであった朝の読書時間がなくなったせいだろうと、勝手に学校のせいになっている。

大学に入学すると、図書館を利用しないで学生生活を乗り越えるのは不可能だということを知り、少しずつではあるが通い始めた。図書館に通い始めると、不思議なもので徐々に読書時間が増えていった。大学の勉強に関してはかなり不真面目だったので、「どうせ勉強しないなら代わりに空いた時間を読書に当てよう」という、何のために大学に来たのかわからない本末転倒な考えを持つようになった。偶然先輩が図書館でアルバイトをしている姿を見かけて、図書館のアルバイトをすれば、もっと多くの本を知ることができるのではないかと思い応募した。履歴書の志望動機欄に「本が好きだから」とだけ書いていたのだが、それで採用してもらえたのは運がよかったとしかいえない。今思えば、アルバイトをしている学生は少々変わっている人ばかりであった。個人的な意見だが、本をよく読む人は、独特の雰囲気を持っている。その雰囲気を採用側は感じ取っているのかもしれない。当時の私にその雰囲気があったかどうかは定

かではないが…。

業務を行っているとき、面白そうな本を借りていく人がある。人が借りた本で面白そうなものがあると、チェックしておいて自分が読んだりする。

また、業務の一環として、返却された本を棚に配架するときにも、面白そうな本がないかアンテナを張りながら行っている。しかし、このような業務方法では、読みたい本が大量発生してしまい、物理的に読むことが不可能なほど読みたい本が積み上がってしまう。頭の中だけでは整理しきれないので、最近ではリストを作って管理している状態である。うれしい悩みではあるのだが、卒業すると図書館にアルバイトという形でかかわることはなくなるので、面白い本を見つける別の方法を模索中である。



## 引き出しづくり

田山 藤丸

(地域政策学科)

「大学生活の目標」について聞かれたとき、何と答えるでしょうか。私の目標は「より多くの引き出しをつくる」ことです。引き出しとは、経験であり、知識であり、自分の人生を充実させる上で貴重な要素でもあります。引き出しを得るための手段は、人の話を聞くこと、または読書することなど様々でしょう。多彩なカタチで引き出しを増やしていくことが私の大学生活だと思います。また、大学時代に身につけた引き出しは、卒業後も自分の夢に向かって突き進む上で、非常に心強い道標になり得るのだと信じています。例えば、政治家になって日本の地域を再生するという夢を私に抱かせてくれたのも、ある人物と本でした。その本は司馬遼太郎さんの「竜馬がゆく」です。今でも何度も読み返し、沸々とエネルギーを煮えたぎらせています (笑)。

本に触れる機会が増え、そもそもなぜ本を読むのかという疑問を持つようになった。自分の知識を増やすため、一服するため、単純に読書が好きだから…。いろいろな理由があるだろうし、どれももつともな理由だが、納得できるものではなかった。しかし、冒頭の言葉を読んだとき、すごく納得した。なぜ本を読むのかという問いの答えがすべてこめられている言葉だと思った。本との交友関係は今後も続けていくつもりだが、うまく付き合っていけたらいいと思っている。

本は、飾りつきの鏡である。ただのまっさらな布を映しても面白くはないが、いろいろな世界を知って、さまざまな形を持ったからこそそれを照らす鏡の中にも興味深い光景を見出すことができる。

私は大学に入学後、すぐにサークルを立ち上げ、まちづくりの活動を始めました。大学周辺の地域行事に参加したり、イベントを企画したり、休耕地を利用して農業をしてみたり…。最近では学生と地域の交流を盛んにするため、新聞制作にも力を入れています。「教室や授業だけが勉強する場所じゃない」というのが私の考えです。地域の中での活動を通して、世代や職業を問わず、ほんとにたくさんの方々との出会い、自分の夢や目標も次第に大きくなっていきました。学ぶことの楽しさをあらためて実感することができたのです。例えば、商工会や町内会の皆さんとの飲み会では、毎回面白い話を聞くことができます。人生の話、恋愛の話、地域の歴史に関する話…。父親と同じ世代の皆さんの話を聞きながら「親父もこんなこと考えとるんかな」と思ったり (笑)。しかしながら、地域活性化という初めての挑戦は苦難の連続であり、「こんな大変なこと、早くやめてしまおう」と逃げてしまいそうになったこともあります。そんなとき、一歩踏み出す勇気と希望を与えてくれたのが

地域の皆さん・先生・仲間たち、そして本でした。

残念なことに、これからの日本経済は右肩成長とはいきません。少子高齢化や地方経済の衰退、地球温暖化など、山積する問題の解決に向けた糸口を私たちはどこに求めればよいのでしょうか。大学には本来、その糸口を探し当てていく役割があるはずで。大学図書館は知識の宝庫であり、先人の知恵から最新の世界情勢まで詳しく知ることができます。まさしく大学になくてはならない存在です。



学生と地域の皆さん（相浦みなと祭りにて）

図書館は地域と同様に、思わぬ刺激を与えてくれる場所であってほしいと思います。私も政治経済に関する情報収集のため、よく利用しています。私たち学生も日々の生活や就活のことなど、目先のことばかりにとらわれがちですが、これからの社会の担い手本人なのだという自覚と意識を忘れてはいけません。将来のことを考え、そのための引き出しをしっかり地道につくりあげていけるような図書館、そして学生が主役となって地域とともに成長していける大学を期待しています。



学生で農業（母ヶ浦町での田植え）

## 図書館とのつきあい方 ～私の場合～

下野 愛弓

（流通・経営学科）

図書館では、レポートなど勉強をするか、本を読みますが、私はまず、図書館でする行動があります。それは、お気に入りの場所、決まって座る場所を探すことです。大学の図書館にもありますが、その場所に誰か座っていると帰りたくなるほどです。なぜ、1つの場所に座りたいのかと気にしたこともありませんでしたが、考えてみると、選んでいる基準としては、人通りがすくなく、大体空いている席を選んでいると思います。私は、初めて訪れる図書館があまり好きではありません。なぜなら、慣れていない場所では、本や勉強

よりも、周りの状況が気になってしてしまうからです。だから最初のうちは1、2時間で集中力が途切れて、帰りたくなってしまいます。しかし、何回か図書館を訪れ、いろいろな席に座ってゆくうちに、自然と落ち着く場所が見つかります。そうすると、図書館が好きな場所へと変化します。1、2時間で帰りたかったはずが、1日があつという間に感じるから不思議です。このように考えてみると、自然と行っている場所探しは私が図書館と関わるうえで基本となる1番大切なことなのかもしれません。

お気に入りの場所が決まるとそこで勉強をしたり本を読んだりするわけですが、私は読む本を探す過程が好きです。小さい頃、週末になると、母に連れられて、よく図書館に行きました。母によると、私はいつも図書館で決められている貸出数よりも多い本を持って

きてしまうので、どの本を諦めさせるか困ったそうです。私が本に苦手意識を持つことなく好きになれた背景には、母の存在が大きいのかもしれません。なぜ、このような話をしたのかというと、母からその話を聞いたとき、自分では覚えていないことだったのですが、昔から変わっていないのだなと思ったからです。タイトルと中身を少し読んで気になったらとりあえず読んでみる所は小さいころからの癖なのかなと感じました。

人にはそれぞれに興味をもつものが異なります。例えば、私で言えばインテリアや雑貨の本を見ると、つい手にとってしまいます。人によって興味が変わるのは当然だと思います。図書館で本を探して歩くうちに、自分がどんな本によく目が留まり、どんな本をよく手にとっているか、傾向のようなものがわかってきます。このようなことから、自分につ

いて知ることができることも、図書館を歩く良さだと思います。しかし最近では、わざと意識しないと行かない分野のコーナーに行くようにしたり、あるいは誰かにおすすめされた本を読むようにしたりしています。図書館には様々な分野の本があるのに偏った分野だけを読むのはもったいないし、なにより、自分は興味がないと思っていた分野でも、読んでみると意外に興味をもったり、新たな発見をしたりすることもあります。図書館にはその人が人生で学んだこと、その人のこだわりが詰まったものなど、世界のことなど、私の人生1回では経験しきれない内容の本がたくさんあります。何かに迷ったときや考えたときに、インターネットではなく本を読んだことはとても良かったと思っています。

多くの人にとって図書館がお気に入りの場所になると素晴らしいと思います。

## 附属図書館からのInformation

### 1F 展示コーナー

#### テーマ “エコしていますか？”

冬は暖房の使用などによってエネルギーの消費が増大する季節です。この機会に、自分たちに何ができるのかを考えてみましょう。

- ・私の、もったいない／マガジンハウス編  
「私の、もったいない」募集キャンペーンの応募2011作品から、優秀作品56点を世代別に紹介。
- ・シンプル節約生活の正解／主婦の友社編  
天然のエネルギーを活用し、昔ながらの知恵、四季に合わせた生活を取り入れた、シンプルで心地よい節約生活を提案。
- ・いますぐできるエコドライブ運転術／谷口 正明著  
わりなくできるエコドライブのヒントが満載。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/lib>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）  
土曜日：午前9時～午後5時まで  
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集責任／長崎県立大学経済学部収書委員会 発行所／長崎県立大学佐世保校附属図書館 発行日／2011年2月1日